

論 説

台南の「救世主」となった「日本人」

——湯徳章英雄説の検証と分析——

天江 喜久

はじめに

第1節 物語の背景

第2節 「英雄伝説」の誕生

第3節 湯徳章英雄説の検証

むすびに

(要約)

二二八事件のさなかに台南市で公開処刑された弁護士湯徳章は戦後長い間、無名の存在であった。しかし、1990年代に入り、二二八事件関連の書物で紹介され始め、事件の70周年にあたる2017年には門田隆将著『汝、ふたつの故国に殉ず——台湾で「英雄」になったある日本人の物語——』の出版を通して、その存在が広く知られることとなり、近年では湯徳章を「民族の英雄」とするナラティブが広がりつつある。本稿はこの湯徳章英雄説、とくに上述の門田の著作を批判的に検証し、そのナラティブの脱構築を試みる。本稿は湯徳章顕彰運動を単独の社会現象としてではなく、「嘉南大圳の父」八田與一や日本統治肯定論などの「親日台湾言説」の系譜上で理解されるべきであると主張する。

はじめに

1947年3月13日、男性は「謀反者」として射殺された。場所は台南の中心地、日本統治時代に「大正公園」（戦後、民生緑園と改名）と呼ばれた市庁舎前のロータリーである。男の名は湯徳章、職業弁護士、享年40歳。公開処刑のニュースは翌日、『中華日報』の一面で報じられた¹。

戦後、国共内戦を理由に台湾では38年に及ぶ長期戒厳令が敷かれ、白色テロと呼ばれる恐怖政治下、二二八事件は永く公に語られることはなかった。湯徳章も然りである。1987年、事件の40周年を機に、忌まわしい事件の真相と和解を求める運動が台南を嚆矢に、全島に広まる。そして、1996年、ついに当時の李登輝総統が国を代表して被害者とその遺族に謝罪し、補償の申請と審査が進められる運びとなる。しかし、1万8000人から2万8000人と推定される死亡者数と比べ、実際に補償申請した人数中、死亡認定者は2017年5月の時点で（失踪を含め）865人とあまりに少ない²。2000年以降、2月28日は祝日となり、毎年各地で追悼行事が行われるようになったものの、事件発生から半世紀以上の年月が経ってしまったためか、はたまた、島内の「族群」³の分裂をいわずらに促進するとみなされているためか、一般市民の関心は必ずしも高いとはいえない。

湯徳章に限っていえば、1998年に最期の場所となった広場が「湯徳章紀念公園」と改名され、脇に小さな胸像が設置された。その後20年近く何ら進展がなかったものの、2014年2月に広場の中央にそびえる「国父」孫文の銅像が台湾独立運動家たちによって引き倒されてから⁴、近年にわかに湯徳章を顕彰する動きが活気づいて来た。同年3月、台南市長頼清徳は湯徳章を悼み、湯の命日にあたる3月13日を「台南市正義と勇気の記念日」とした。2015年3月13日、湯徳

章の旧居は「台南市の政治分野における歴史的な重要人物の旧居」として認定されることが決まり、市長賴清徳からプレートが贈呈された。そして、事件の70周年にあたる2017年には門田隆将の著書『汝、ふたつの故国に殉ず——台湾で英雄となったある日本人の物語——』が出版された。湯徳章に関する初の大著であると同時に、日台同時出版であったため、話題を呼んだ⁵。

門田は湯徳章の遺族をはじめ故人を知る家族や友人への聞き込みと数少ない資料をもとに、正に帯紙が訴えるところの「日本と台湾の絆を表わす英雄が歩んだ苦難と感動の物語」を綴っている。実在した人物の伝記ゆえに「ノンフィクション」(帯紙)「生の歴史」(6頁)「歴史のドキュメント」(349頁)としているのかもしれないが、文面上はとても史実とはいえないような空想(フィクション)が多く混在する。あえて一つ一つ取り上げることはしないが、度々出現する湯徳章やその他の人物の心情描写や当時の会話などは現存する文献から判断する術はなく、故人の家族や知人、また事件当時の目撃者への取材からも正確に再現するのは限りなく不可能に近いといえる。また、後述するが作者は自分の求めるところの物語が完成するために、作為的に情報を取捨選択しているふしがある。本稿は門田の作品を批判的に検証するとともに、湯徳章の「英雄伝説」が誕生していく過程を考察し、結論でその意味について考える。それは近年、とくに東日本大震災後「日台友好」の機運がさらに盛り上がり⁶、後藤新平、八田與一など日本統治時代の人物が台湾の近代化に貢献したとする親日・植民地肯定論的な語りが日台の両国で比較的無批判で受け入れられている風潮があるだけに重要な作業であると考え⁷。

第1節 物語の背景

1. 「日本統治時代の申し子」湯徳章

ここでまず初めに、湯徳章という人物を史料にもとづいて再現する。湯徳章は、1907年1月、台南で日本人巡査坂井徳蔵⁸と台湾人の母・湯玉の間に生まれた。当時はまだ日本人と台湾人の結婚について定めた法律が存在しなかったため、湯徳章は戸籍上「私生児」として扱われている⁹。1915年8月、8歳の時に噍吧嘰事件(西來庵事件)で当時南庄派出所に配属されていた父親は「暴徒」に襲われ殉職する¹⁰。その後、母親に女手一つで育てられた湯徳章は貧困に苦しみながらも、優秀な成績で玉井公学校を卒業し、台南師範学校に進学している。しかし、二年後に中退、玉井に戻り、製糖工場で働く。1927年、台南州乙種巡査の試験を受け合格、20歳で巡査教習生になる。巡査、巡査部長と経て、1933年10月には警部補に昇進している¹¹。その後、台湾籍ゆえ、さらなる昇進の見込みが薄いと感じたのか、湯は叔父坂井又蔵の養子となり、1936年から坂井徳章(本籍東京)と改名する¹²。しかし、



図1 湯徳章
(出所) 李文雄提供

1939年5月に警察を退職し、翌年、東京の叔父を頼って日本に渡航し、苦学の末、高等文官試験司法科と行政科の両方に合格する。その偉業は台湾で報じられている¹³。1943年、台湾に戻り、台南で弁護士事務所を開設する。終戦後、日本に引揚げることができたのであろうが、家族と共に台湾に残る決断をする。おそらく、その際に本籍を台湾に戻し、再び湯徳章を名乗る。戦後はその能力を買われ、台南市南区の区長に就任する。だが、1946年5月に台南でコレラが大流行した際、湯が衛生局に至急消毒、感染者の隔離と予防注射の手配を要請したにも関わらず、迅速な処置が施されず、多くの死者を出す結果となった。この際、湯は「抗議」の辞職をしている¹⁴。1946年4月、台湾で戦後初の省議会議員選挙に參選するも、台南の名士で医師の韓石泉に敗れ、次点に終わる¹⁵。政界入りは失敗に終わったものの、多くの支持を得た湯は同年10月に台南市人民自由保障委員会の主任委員に選出され、台湾人の人権保障の活動に努める¹⁶。二二八事件では「二二八事件処理委員会」のメンバーとして、混乱の收拾にあたるが、鎮圧に乗り出した軍に身柄を拘束され、冒頭で述べたように無惨にも銃殺刑に処される。

2. 台湾二二八事件

二二八事件は周知のように、1947年2月27日に台北で闇タバコを売っていた女性が摘発され、暴行を受けたことに憤慨した民衆が翌日政府に抗議のデモを行ったところ、不意にも機銃掃射を受け、死傷者を出したことが引き金になり、民衆の不満が一気に爆発、台湾全島規模の暴動へと拡大していった政治事件を指す。この事件で各地の政府機関や軍の施設が襲撃され、外省人が本省人の暴行を受け、死傷者を出す事態に発展した。しかし、平和的解決を望んだ有力者たちは各地で「二二八事件処理委員会」を結成し、政府との交渉に当たった。そのなかで、事件の真相解明、責任者の処罰、台湾省の自治などの要求を政府に突き付ける。行政長官公署長官の陳儀は表では二二八事件処理委員会と協調する姿勢を見せたが、裏で中国大陸の蒋介石に援軍を求める電報を秘密裡に送り、援軍の派遣が決まるや否や、協議を中止、全島に戒厳令を布き、二二八事件処理委員会を「叛乱団体」と指定し、そのメンバーの逮捕に踏み出した。9日未明、軍が基隆に上陸するなり、政府は武力制圧に乗り出し、各地で多くの犠牲者を出す結果になる。そのうち、二二八事件処理委員会のメンバーを含め多くの者が冤罪を被った。また、拷問（または拷問の恐怖）のためか、命乞いか、逮捕者の密告が相次ぎ、さらに多くの被害者を出すこととなった。軍事裁判にかけられた者に公平な裁きを与えられたとは到底いえない。結果、二二八事件は本省人と外省人との間に埋めることのできない溝を築くことになり、民主化が始まった90年代中頃から犠牲者に対する謝罪や補償が行われてきたものの、70年経った今日も事件は解決したとはとてもいえず、歴史の傷はいまだ癒えてはいない¹⁷。

アメリカの人類学者ロバート・エドモンソンは「二二八事件が台湾史の想像を可能にさせた点で台湾史上一番重要な事件」と評論している¹⁸。それは二二八事件の悲劇が日本の降伏により植民地支配からの解放に沸く台湾の住民に「祖国復帰」を幻滅させ、彼らを「台湾人」足らしめ、独立建国の願望を芽生えさせたと考えるためである。李登輝前総統は1994年の司馬遼太郎との対談のなかで、二二八事件が台湾人の「出エジプト」を決心させたと語っている¹⁹。また台湾独

立派の学者らは過去に戦後中華民国の正統性否定と国民党の弱体化のために二二八事件の研究に躍起になってきたといえる。逆に保守の国民党寄りの学者や知識人は二二八事件を過小化し、その多くを語ることをして来なかった。この対立が鮮明に現れるのが事件死亡者の総数ではないだろうか。独立派はその数を二万人以上としているのに対して、保守派は数百、多くて数千人としている²⁰。

3. 二二八事件当時の台南

二二八事件の際、台南市は台湾の他の地域に比べて平穏であったといわれている。事件直後、新聞が読めなくなり、その他の通信施設が機能しなくなったため、民衆は事件の詳細をすぐさまに知るができなかった。それでも、3月3日に本省人が外省人に危害を加える事件が台南でも発生している²¹。『台湾新生報』の記者の楊熾昌は当時街中で台南工学院の学生が軍事訓練用の銃を持ち、市街戦に参加するといっているのを目撃し、危ないことはよせと説得したと回想している²²。街は混乱に陥ることはなかったものの、市長をはじめ、政府官僚は皆身の危険を感じて逃亡し、本省籍の職員のみ普段通り出勤していた。一方、南洋、中国戦線から復員した軍歴のある台湾人は軍服を着て、軍刀を手にもつ郭振純の証言によると、3月1日、トラックに学生らしい若者が乗って、拡声器で決起を促していた。市参議会の議員たちがすぐさま市民に冷静に対処するよう呼びかけたため、一般市民はおとなしく家に戻ったが、血の気の多い若者は民生緑園に数百人結集し、編成を組んでトラックに分乗して、武器の奪取に出かけた。郭たちは警察会館を襲い、かつて台南在住の日本人から押収し、保管してあった日本刀やピストルを数十丁奪った。当時、警察官は報復を恐れ、身を潜めていたため、何の抵抗もなかったようだ。そして、マッカーサーに陳情するため飛行機を東京まで飛ばそうと台南飛行場に向かったが、なんと飛行機は鉄くずやアルミを売って金儲けしようとした連中によってすべてスクラップにされていたため、計画は幻に終わったという²⁴。

台南市長卓高煊は5日の午後になってラジオで声明を発表し、事件処理への四原則を呼びかけている。参議会議長の黄百禄も市長の声明発表の後に、学生らに復学するよう呼びかけ、治安回復のため、学生その他の市民が押収したあらゆる武器を提出するように促している。台湾省参議会(台南市)議員で国民党台南市党部指導員の韓石泉も市長に同調し、平和解決を訴えた。青年団台南分團幹事長の莊孟侯も、3月3日の事件は誠に遺憾であったと述べ、「本省人も外省人も皆黄帝の子孫、皆血の繋がった兄弟、血を流し合うのではなく、政治問題は政治的解決されるべき」との立場を示した²⁵。

第2節 「英雄伝説」の誕生

1. 愛と受難の物語

3月5日から湯徳章逮捕に至るまでの経緯はのちに詳述する。ここではまず、門田の著書で描

かされている湯徳章の最後のシーンを簡述する。3月13日、逮捕後、過酷な拷問を受けた湯は、法廷で死刑を宣告され、拘置所から縛られたままトラックに載せられ、見せしめとして市内を連れ回されたのち、民生緑園で降ろされ、集まった群衆の前で公開処刑される。処刑時、兵士は湯に目隠しをし、木に縛り付けようとするが、湯はそれを無用だと抵抗し、その上、跪くように命じられるとそれをも拒否する。そして、「もし、誰かに罪があるとしたら、それは私一人で十分だ!」「私には大和魂の血が流れている!」と台湾語で述べ、最期に日本語で「台湾人、バンザーイ!」と叫んだ。そして、数発の銃声が響きわたるなか、崩れ落ちた²⁶。

門田は湯が処刑された理由は軍の要求した「蜂起」に加わった学生の名を記したリストを提出するのを拒否したためだとしている²⁷。つまり、若い学生たちが連座され、裁かれるのを身を挺して守ったというわけである。現実には、湯の死後、拘留されていた容疑者は皆無罪となり、釈放されている²⁸。そのため、二二八事件時、台南市での死亡者が他の都市と比べて圧倒的に少ない(下記表参照)のは、湯一人が罪を被ったからだとする語り定着しつつある。正に己を犠牲にし、街を救った英雄、いや救世主というわけである。

表1 都市別二二八事件被害者統計表

都市名	死亡	行方不明	その他	合計
基隆市	76	37	24	137
台北市	93	28	87	208
台北縣	74	17	39	130
台中縣	24	3	47	74
台中市	18	3	59	80
彰化縣	13	1	123	137
雲林縣	42	11	37	90
嘉義縣	42	10	88	140
嘉義市	63	17	41	121
台南縣	22	11	89	122
台南市	8	1	56	65
高雄市	88	15	134	237
高雄縣	11	5	29	45
屏東縣	17	4	82	103
宜蘭縣	18	7	21	46
南投縣	19	0	32	51
花蓮縣	7	2	175	184

(出所)『二二八60年台湾新紀元』二二八事件紀念基金会、2007年、69頁。表中の網掛けは著者による。

2. 「英雄伝説」の真相

国民的英雄は民族(ネーション)の創造と密接に関連している。ベネディクト・アンダーソンに倣っていえば、英雄はネーションという共同体を「想像」可能とし、体現化するうえで欠かせない政治的記憶装置であるといえる。したがって、「英雄」とは至って「政治的」である。こう

した観点からすると、湯徳章の射殺現場である民生緑園（旧大正公園、現湯徳章紀念公園）に日本統治時代は児玉源太郎の石像がそびえ、それが戦後「国父」孫文（孫中山）の銅像に取って代わり、そして2016年、独立派のグループによって引き倒されてから現在に至るまで「空席」になっていることは、台湾をめぐるナショナル・アイデンティティーの変遷を如実に物語っているといえよう。台湾人アイデンティティーの台頭の著しい今日、この国は今、孫文、蒋介石、鄭成功などの「中華の英雄」に代わる「台湾の英雄」を求めている。われわれはこうした歴史的、政治的文脈で湯徳章の「死」と「復活」を考える必要がある。

それでは、湯徳章の英雄伝説はいつ、どのように誕生したのだろうか。門田の著作の出版から遡ること約四半世紀、台南市政府が刊行する『台南文化』で二二八事件の特集が生まれ、そのなかに湯徳章の息子（養子）湯聰模のインタビューが掲載されている²⁹。興味深いことに、当時彼は父親の死について「二つの説」を提起している。それは湯が他人の罪を被って犠牲になったとする説と「密告」され、叛乱の首謀者として処刑されたとする説である³⁰。後者の説は門田の著作のなかではほぼ完全に抜け落ちている。

この「湯裏切られ説」は1996年に台南市政府が発行した『二二八事件在台南市與湯徳章律師之遇難』に詳しい³¹。該書で浮かび上がってくる人物が侯全成（1902-1973）である。侯は台南市の参議員であり、3月7日に二二八事件処理委員会台南市分会の宣傳組長に選出されている。ちなみに湯徳章は同委員会の治安組長に選ばれている。事件後の処置等について政府側と交渉するために各地の有識者で結成された当委員会は、9日に戒厳令が布かれたのち、「非法組織」とされ政府から解散を命じられ、主要メンバーらは台湾各地で軒並み逮捕されることになったことはすでに述べた³²。

台湾省警備司令部参謀長の柯遠芬の報告書によると、「台南市は3日に恐怖事態に陥り、地方法院院長徐懷楷、首席検察官陳樟生、海関主任王保作など百人余りの者が暴徒から暴行を受け、怪我を負い、憲兵隊に救護を求めている。長栄中学の教員李國澤率いる台南工学院の学生と暴力団数百名は憲兵隊を包囲し、憲兵の出動を阻止した。学生たちが治安維持にあたっているというが、3日午後、暴徒湯徳章、侯全成などが各地で市民を扇動し…外省人は殴打され、警察局長は監禁され、警察署の銃器は押収され、結果、連日暴動の有様である（下線は著者による）」³³。報告書のなかで、湯を含めた三名が名指しで批判されている³⁴。9日には市参議会会議場で台南市各界連合大会が開かれ、425名の有権者が満場一致で市長卓高煊の留任を否決した。そして、全島初の市長選挙が行なわれ、投票の結果、市参議会議長黄百祿 179票、侯全成 109票、湯徳章 105票を獲得した。なお、韓石泉は投票前に参選辞退を宣言している³⁵。

3月11日、軍が台南に進駐を開始し、午前10時に市議会が包囲される。その場にいた市参議員と学生は連行される。同日、台南地区指揮部で一部の市参議員が指揮官と会議を開き、武器を誰の責任でどのようにして回収するかと問われたところ、侯全成が自分が責任取ると名乗り出、戸籍による身元の確認、政令の伝達等の仕事を買って出たと韓石泉は回想している³⁶。

二二八事件で一時的に「失脚」した台南市長卓高煊の回顧録によると、以下のようである。

11日午前、参謀長楊俊將軍率いる軍隊は台南に進駐し、政府の寛大政策により、暴徒を率いて監獄の護衛の武器を略奪した叛乱の首謀者湯徳章のみを拘束し、法に基づき処刑する³⁷。

3月13日、午前11時、湯徳章銃殺。翌日(14日)の新聞は、太字で「危害国家民族」という見出しの下に「台南暴徒坂井徳章 昨執行槍決」と掲載した。公表された罪状は以下の通りである。

暴徒坂井徳章(即ち湯徳章)は台南市人民自由保障委員会の名義を利用して、国家に危害を加える目的で多くの暴徒を募り、軍公務員に対し公然と集団脅迫、暴力により怪我を負わせた。また、不法組織を結成し、暴徒と結託し、治安を乱し、軍の武器を略奪、軍事施設を破壊するなどの脅威を振る舞い、不法きわまりなし。本部は調査の結果その真実を確認し、証拠は確実足るため、戒嚴法第四条第五項、刑事訴訟法第二百九十三条…の規定に基づき、死刑に処し、公権を終身はく奪とする³⁸。

また、「暴動嫌疑者」として以下の人物の名が挙げられている。



図2 『中華日報』3月14日の記事 (出所) 台南市立図書館所蔵。著者撮影 (2017年8月3日)。

湯徳章(市人民自由保障委員会主委、弁護士)、莊孟侯(三民主義青年團台南分團幹事長、医師)、莊茂林(市参議会秘書)、沈瑞慶(興臺日報社長)、楊熾昌(新生報記者)他五十名³⁹。

このなかで、最終的に処刑されたのは湯徳章一人である。前述した長栄中学の教員李國澤と侯全成に限っては、名前すら見当たらない。その他の「暴動嫌疑者」は有罪判決を受けたが、上訴したのちに無罪となっている⁴⁰。『二二八事件在台南市與湯徳章律師之遇難』は以下のようにまとめている。

湯徳章は不実な情報をもとに暴徒として銃殺の刑に遭う。これは「殺雞儆猴」(鶏を殺して、猿を驚かす)であり、湯は犠牲は祭壇のいけにえである。この遺恨は千年に及ぶ⁴¹。

しかし、なぜ湯徳章一人が「祭壇のいけにえ」となったのだろうか。皮肉にも、それは彼に「日本人」の血が流れているということに起因する。事件当初、行政長官の陳儀ら台湾省の政府と軍の指導者は二二八事件を「日本人絡みの暴動」だと考えていたふしがある。8年に及ぶ抗日戦争からくる日本人への敵意なのか、それとも日本語教育を受け「日本人化」した台湾人への不信感なのか、背後で扇動しているグループがいると政府高層は勘ぐっていた⁴²。3月27日付の『中華日報』の社説は「台中、嘉義で軍隊に攻撃を仕掛けた暴徒らを指揮していた者のなかに日本人がいたのは確実な情報であり、目下高雄市地方裁判所で嫌疑にかけられている暴徒のなかにも日本人が9名いる。暴徒たちが「日本人に危害を加えない(不打日本人)」という行為は単純な感情上の錯覚ではなく、日本人が計画した陰謀であると思われる。…今からでも遅くはない。どんな名義であれ、台湾に留用されている日本人⁴³は即刻日本に引揚げさせるべきである…」と述べている⁴⁴。この「二二八事件日本人責任論」は本省人にとっても都合のよい口実だったといえる。自身の罪を「日本人」になすりつけてしまえばよいからである。3月3日の台南における「暴動」ののち、台南市の有識者が政府に向けて発信した声明には「われわれは皆黄帝の子孫」「本省人、外省人関わらず、われわれは皆黄帝の子孫、皆兄弟である」といった中華民族ナショナリズムの文言が並べられている⁴⁵。3月11日、軍によって逮捕された者のうち、拷問に耐えかねてか、あるいは保身のために、「湯徳章が日本人であり、元凶である」と吐露した人物がいたようだ。この点については次節で詳述する。門田は直接名指しすることは避け、「特にエリートは拷問や圧迫に弱い」と触れるに留まっている⁴⁶。そして、湯徳章がやり玉に挙がったもう一つの理由として、取り調べの際に憲兵が請求した武器略奪を働いた学生たちの名前を洩らさなかったことを挙げている。以下、門田から引用する。

取り調べに当たった憲兵は、徳章に学生の名前を言えと強硬に迫ったのである。3月11日は、台南工学院も、軍に襲撃されている。ここで逮捕されたのが、林宗棟ら学生隊のリーダーたちである。彼らもまた厳しい取り調べを受けている。もし、徳章が彼らの名前を出

せば、学生たちの「命」も危うい。徳章が出す名前は、そのままその人物の生死にかかわるものである。徳章本人にも、そのことは当然わかっていただろう。どんな拷問にも耐え抜く徳章の気迫は、若者の命を守り、人権を守り抜くという信念に基づくものだった…⁴⁷。

しかし、湯徳章は門田がいうように本当に「学生を守りぬいた」ゆえに処罰されたのだろうか。湯が正直で剛直な性格の持ち主で、拷問を受けても、他人に罪をなすりつけたり、責任逃れをしたりすることがなかったことは十分想像できる。武器弾薬を押収した人物のリストの提出を拒んだ湯は過酷な拷問のため手指がはれ上がり、箸すら持てない状態だったと記者の楊熾昌は回想している⁴⁸。しかし、湯が口を割らなかつたとはいえ、「蜂起」に関わった学生たちの一部は逮捕され、投獄されている。なかには当時台南工学院の学生リーダーの一人であった王振華のように数か月監禁された学生もいた⁴⁹。また、逮捕され、のちに釈放された者のなかに湯のおかげで命拾いしたというものは不思議と一人もいない⁵⁰。王振華に限って言えば、釈放は湯の行為よりも父親が息子のために東奔西走したためといえる。

父は侯全成が軍や憲兵隊とパイプがあると人づてに知るなり侯を訪ね、自分の一人息子を助けてほしいと願って出た。ところが、侯は父に私と他の工学院の学生がいかにかにひどく、台南市を混乱に陥れたといい、手元にあった何枚かの写真を指さしながら、もっと逮捕されるべきだといった！父は大変憤慨したが、冷静を装った。そして、すぐさま侯の当時の演説内容やトラックを使って軍に米等の物資の差し入れを行ったなど数々の侯に不利な証拠をかき集め、再び侯を訪ねた。侯は父が提示した資料をみるなり即刻態度を変え、父を受け入れた。のちに出獄した際に、私は侯を訪ね、「御恩は一生忘れません」と頭を下げたのを覚えている…父は当時私のために高雄駅前の家を四軒、および家のなかに大切に保管していた高麗人参をすべて売り払ったそうだ…父が侯を訪ねてまもなく、ある日突然林少将が差し入れを持って私の牢獄を訪ねてきた…⁵¹

当時台南工学院で逮捕された人物は王振華の他に、林宗棟⁵²、鄧凱雄（学生自治會長）、陳徳信、商満生、それに李挙賢教授（教授会会長、日本人の妻をもつ）などがいた⁵³。王振華と林宗棟は3月13日に学校で読書しているところ背後から銃を突き付けられ、連行された。王は自分たちの逮捕に侯全成が関係していると確信している。また、のちに二二八事件処理委員会のメンバー侯全成、韓石泉、蔡丁賛、黄百祿らは軍が進駐してきているのを知るや否や、すべての責任を学生に押し付けようとしたという噂も耳にしたという⁵⁴。

一方、学生とその他の逮捕者がのちに釈放されたのは、蒋介石の命を受け、大陸から派遣された国防部長の白崇禧が事件を平穏に終息させるために逮捕者を釈放するという方針を打ち出したためとする説がある⁵⁵。二二八事件における白崇禧の評価に関しては意見が別れるところだが⁵⁶、証言者のなかには白將軍の「寛大処置」に感謝を述べる者も少なくない。たとえば、事件当時台南市参議員だった蔡丁賛は白崇禧の台湾訪問により上訴の道が開け、高等裁判所での再審の結果

無罪となり、10月3日に釈放された回想している⁵⁷。また、台南工学院の学生たちも、湯徳章に対する謝辞はなくても、皆口を揃えて、白將軍の「寛大処置」に感謝している⁵⁸。

3. 「台南二二八事件のユダ」侯全成

門田は台南市で二二八事件における犠牲者が少なかったのは湯一人が罪を被ったからだというストーリーを展開している。これは門田独自の説ではなく、「湯徳章英雄説」の系譜を継承したものである⁵⁹。しかし、こうした説は最近まで決して主流ではなかった。以前の「定説」は韓石泉の自伝に見られるように韓や侯全成など「穏健派指導者」が事態を深刻に見、矢継ぎ早に、政府や軍と「協調」する姿勢と行動を採ったためとされてきた。韓石泉から引用する。

(3月4日)午後四時半、学生と青年が政府に提示した条件に対する返答を要求する。彼らの態度は凶暴で、銃剣を帯刀し、出入り口を警備していた。異常なほど緊張した空気が流れ、言葉を発するのすら不謹慎に思えた。黄議長と侯全成参議員が説明したのち、私は四大原則を説明した。すなわち、

- 一、拡大せず。
- 二、流血せず。
- 三、現行の行政機構を否認しない。
- 四、政治問題は政治的方法で解決する。

…3月11日、軍が台南に進駐し、午前十時、台南市参議会が包囲される。議場の参議員、学生等取り調べを受け、私もトラックに乗せられる。上がる前に銃を構えた兵士に「お前たちは間違っている」といわれる。台南地区の指揮中心に連れて行かれ、そこで一部の議員と一緒に会議室で指揮官を主席とし、武器回収について話し合う。指揮官は筆で「兵火也、虎也」と書き、その意味を説明した。早く行動しなければ、取り返しのつかないことになる。そして、誰が責任をもって武器回収するかと聞いてくる。誰一人として答える者がいないでいると、侯議員が勇気をふり絞り、自分が全責任を負うと名乗り出た⁶⁰。以後、戸籍の調査から政令の伝達を協力し、事件の收拾を担当する委員に推された。のちに検挙された者のなかには、処罰を受け当然の者もいたが、犯罪人にならざるべき者も出、なかでも少数ではあるが、誠意をもって国家に尽くした者もあり、冤罪を被る結果となった。幸いにして、台南市では、外省人被害者はごくわずかで、生命にかかわるような問題は発生していない⁶¹。二二八処理委員会のなかでは、治安部長の湯徳章が銃殺された以外、その他に服役者をほとんど出さず、私に限っては、縛られることもなく寛大な処置を受けた。かつて、ある軍の高官に「私のしたことは正直大変褒められることであって、もし私の行いを許さない者がいたら、その人は何も正確な判断ができないといえよう」といわれたことがある⁶²。

韓石泉は軍の「寛大な処置」と自分の「英断」を強調したいのだろうが、同じ二二八処理委員

会の幹部であった湯の死を悼む言葉がないのはまったく不自然である⁶³。そもそも湯が二二八処理委員会の治安組長を任ずる経緯が不明瞭である。市参議員の一人であった蔡丁賛の証言によると、委員会が治安組長に湯徳章を推薦した時、湯はマラリアを患っており、体調が芳しくなかった⁶⁴。彼は極力固辞したが、友人の強い勧めに押し切られ、役を引き受けることになった。3月6、7日の二日間、彼は市内の暴力団の長を集め、暴力を止め、問題を起こさないように根気強く説得した。はじめは躊躇していた人びとも最後は渋々ながら受け入れた。市街に平穏が戻ってきた。その一番の「功労者」である湯が処刑されたのはまったくの冤罪であると蔡は嘆いている⁶⁵。治安組長である湯のもう一つの役割は押収された武器の回収である。どちらも危険かつ容易ではない仕事である。過去に警部補の経歴がある湯が最も適任だったともいえるが、誰一人として引き受けたくなかったというのがおそらく本心であろう。下手をすれば、暴徒の濡れ衣を着せられる危険すらあるからだ⁶⁶。いずれにせよ、二二八処理委員会の主任委員である韓石泉から事件の混乱收拾の最大の功労者に対する労いの言葉一つ聞かれないのは不可解としかいいようがない。

前記の王振華の証言の他にも侯全成を非難する証言がいくつかある。事件当時、『台湾新生報』の記者を務めていた楊熾昌によると、侯は当局が二二八処理委員会のメンバーを厳しく処罰するという情報を聞くなり、軍司令部の人間に湯徳章の父親が日本人であり、問題人物であると密告したという⁶⁷。さらに、侯全成に関して下記のように証言している。

私が考えるには、湯の死は侯と絶大な関係があります。侯はペテン師です。二二八事件の当初、彼は湯の人権保障委員会の青に白字の旗をトラックにくくり、そのトラックの上から演説をしていました。場所は議会の前の十字路です。その内容はきわめて扇動的でした。彼は私を見つけるなり、明日の新聞で大きく報道しろと要求しました。私はその決定権は私にないといい返しました。彼の言論の大半は今日外省人がどうしたこうしたと、ほとんど悪口です。しかし、軍が来て、いざ戒厳令が敷かれると、態度を一八〇度変更し、軍にべったりするようになりました。湯徳章は日本人坂井徳章であると軍に告げたのも彼です。私が入獄している時に侯は私に会いたいといってきましたが、おそらく口止めしたかったのでしょう。私は会いませんでした。彼は善良な人間ではありません⁶⁸。

台南工業専科学学校の卒業生でのちに白色テロの被害者となった張大邦もその回顧録のなかで、侯全成を告発している。

湯と侯は台南市議会のリーダーとしてともに働いていた。しかし、侯は罪を咎められるのを恐れ、台湾人を裏切った。自ら貨物車を調達し、軍に缶詰食品などの差し入れを行っている…彼は当時巷で副市長と呼ばれていた。台湾人の運転手を二人雇い、台湾飛行場に支援物資の補給を行っている。避難していた外省人にも同様である…台南の二二八当時死者が少ないのは何故か？第一に、それは湯が手中の二二八関連資料をすべて焼却処分したため、そして、第二に、侯が民衆を裏切り、軍を支援し、行動でもって中国人に服従する態

度を表明したため、台南では武装抵抗に発展せず、鎮圧が比較的緩やかだったからである⁶⁹。

そのほか、2000年以降陳水扁政権の方針で機密解除された各政府機関の二二八事件関連の政府公文書のなかにも、侯全成に関する報告が何点か見つかっている。

台南市参議員の侯全成は性格狡猾、詭計を弄すること多し。この度、逮捕後保釈された原因は、悪どい手法で離間を引き起すことに成功したからである。事件中、淫らに民衆に叛乱鼓舞を宣伝し、叛乱組織と密議をこらし、悪事の止まること知らず。しかし、事件後は一転して叛乱組織と袂をわかち、情報を各機関に密告し、防備対策を練る手助けをする。(侯は)まるで常に自分の退路を準備している兔のようにずる賢く、蝙蝠のごとく投機主義的で自分の利益しか頭にない。政府軍が叛乱者を逮捕に乗り出すと「自分は全力で政府擁護した」「暴徒との密会で決定した事項を各政府機関に細目に通報して、事前に対応をうながすようにする」などと弁解したため保釈される。当局が彼から賄賂を受けたらどうかはさらに詳しい調査を要する⁷⁰。

晩年クリスチャンに改宗した父親の影響で、台南のミッション・スクール長老教中学(のちに長栄中学に改名)で学び、その後台湾総督府台北医学専門学校に進学した侯全成は卒業後、満州国に渡り7年滞在したのち、29歳の時に故郷の台南に戻り、開業する⁷¹。戦後、政界に進出し、1946年4月台南市参議員⁷²、1950年台南市議会議員に選出される。1954年には台湾省政府委員に抜擢され、以後18年これを務める。不幸にも、1973年1月23日に高雄市の踏切で事故死している。新聞の報道によると、侯を乗せた車が(遮断機のない無人)踏切に入ったところ、突進してきた急行列車に激突され、即死したそうである。享年72歳、同月19日に結婚50周年を祝ったばかりであった。侯の死去は大手新聞の全国紙の紙面で報道された⁷³。『中華日報(南部版)』は、事故の詳細を報道している。匿名の目撃者の証言によると、侯を乗せた車が事故現場から約200メートル離れた友人の事務所を出、踏切に差し掛かったとき、ちょうど外から車の中の者に挨拶する者があり、そのためか車は踏切内で一時停車した。そして、前方から列車が迫って来たものの、車は一向に動き出す気配がなく、そのまま大惨事と化してしまった。当時、曇りで小雨が降り、冷たい風が吹いていた上、稀な事故だったため、「怪奇現象」と呼ぶ者すら出た⁷⁴。また、二二八事件当時の侯の「背信行為」を知る者は因果応報だと断じたりした⁷⁵。

門田は自身の著書で本稿がここまで用いた主要な文献をすべて参照したとしている。しかし、不思議と二二八事件における侯全成の役割について一切触れていない。その叙述の多くを楊熾昌の証言に依拠しているものの、侯を名指して非難することはしていない。唯一、

「湯徳章は日本人だ。彼が元凶だ」仲間であるはずなのに、苦し紛れにそう吐露して、釈放される参議員もいた。とくにエリートは、拷問や圧迫に弱い。⁷⁶

とだけ述べている。これは意図的に削除しているとかいいようがない。その一方で、事件当時、台南地方法院台南検察局の検察官だった張有忠については手厳しい。

1987年に自費出版した『私の愛する台湾と中国と日本』⁷⁷の中で、この時のことを張有忠はこう記している。

私は臨時軍事法廷を開く前に証拠調べをしたか、本人に弁解の機会を与えたか等質問したが、とにかくあいつは悪い、事は急を要するというだけで私の質問に答えようとしない。これでは埒があかないと思って、私の意見を述べさせてもらいますと切り出し、「治安維持委員会は地区の有識者が自衛のため、手弁当で働いている団体であり、政府の力によって治安が回復されるまでの臨時組織にすぎない。決して叛乱を企図する者でないばかりでなく、政府に協力する有益な存在としての価値を認めなければならない。又日本人は蒋介石総統が宣明した以德報怨の大慈悲心に感謝感激しており、台湾社会を攪乱する理由もなければ必要もないと思われる。なお湯弁護士の父は警察官として働いてきた日本人ではあるが、母および本人は戸籍上正真正銘の台湾人であり、弁護士として台湾人の利益を守るため、日本官憲と渡り合ってきた立派な人物である。彼は治安が乱れるのをみるに忍びず、同憂の青年に推されて隊長になり、昼夜分かたず社会の秩序維持に東奔西走してきたことは、市民の等しく認めるところである。正規の裁判手続きにより詳しく調べた方が公平ではないでしょうか」と縷々陳述したが、黙って聞いていた三人は何も言わず、しばらくして首席は休廷を宣言した。私は一殺警世のため、湯弁護士を槍玉に挙げる既定方針に違いないと直感し、あほらしいやら悔しいやら悲しいやらで落ち着かない自分を押さえながら別室に行き、立て続けにタバコを吸った。腹が立つけれどもなす術を知らない⁷⁸。

門田は張有忠が湯徳章の案件を「放置した」とし、その訳は張が湯に個人的な恨みがあったからとしている。

当時、審判に参加した台湾人の検察官、張有忠は、台南県の柳營というところの一番の富豪・劉博鴻の娘婿であった。その劉には三人の妾がいた。張有忠は、三番目の妾の娘を娶った。劉は、すでに年を取っていて、精神もだいぶ恍惚となっていた。ある時、張が劉に財産の処分について提案したら、その通りにした。正夫人は、これでは自分に不利なことになるのではないかとということで、財産の保全のため、湯徳章に台南の地方法院に劉博鴻の禁治産を宣告するように依頼をした。その張が軍事法廷にいたから、湯徳章は「どうしようもないな」という無力感があった。張が、財産の禁治産のもう片方の当事者だからである。そういう因果関係があったから、湯徳章は死ぬ道から逃れることはできなかった。ちなみに、徳章が亡くなった後、禁治産は取り消された⁷⁹。

門田はこれを台南市政府発行『台南文化』に掲載された楊熾昌の証言を根拠にしたとしているが、それは正しくない⁸⁰。そのうえ、このような見解は張にとっていささか不公平といえよう。張有忠が湯徳章と面識があったことは上記の臨時法廷の擁護の内容からして明らかであるが、張が自身で回顧するように湯の処分はおそらく政府上層の人間があらかじめ決めたものである。そのような状況で一本省人の張に何ができるというのだろうか。張は自身の著作のなかでまた次のように述べている。

…(台南監獄での臨時軍事法廷から戻り)玄関に入るか否や、隣人が駆け込んで来て、「駅から市内に入る州庁前の円公園で湯弁護士が五時頃、公開銃殺刑を執行された」と青ざめた顔で述べた。私は臨時軍事法廷のこと等語る気になれず、また、経過を洩らすこともできないから、「お気の毒です」と小さな声で答えたが、悲しくて悲しくて心の中で泣きながらその冥福を祈り、好きな晩酌を止め、黙々と御飯をかき込んだ⁸¹。

門田が著書のなかで侯全成など台南の一部有力者が湯を裏切り、当局に差し出した点について踏み込んで検証していないのは、おそらくは湯徳章が「すすんで自分を犠牲にした」というストーリーを完成させたかったためといえよう。

第3節 湯徳章英雄説の検証

第2節ですでに述べたように、湯徳章は処刑される際に、押さえつけようとする兵士に抵抗しながら、台湾語で「もし、誰かに罪があるとしたら、それは私一人で十分だ!」「私には大和魂の血が流れている!」といい、射殺直前に日本語で「台湾人万歳」と絶叫したとされている。これは『南瀛二二八誌』(2001年)で李谷(二二八事件当時、20歳余り)という湯徳章を知る人物の目撃証言によるものである。門田は李谷の証言を元に湯徳章の最期を再現しているが、李谷以外に湯が台湾語で「もし、誰かに罪があるとしたら、それは私一人で十分だ!」「私には大和魂の血が流れている!」といったという証言は存在しない。また、李谷は湯が三発の銃弾を受けたと証言している⁸²。謝碧連の『二二八事件在台南市與湯徳章律師之遇難』(1996年)では、湯徳章が日本語で「台湾人万歳」と叫んだと記述してはいるものの、その他の発言に関する言及はない⁸³。謝碧連は引用は単に「目撃者述」としている。この目撃者が誰であり、複数人物によるものなのかははっきりしないが、おそらくは謝碧連本人であると考えられる。謝碧連は当日台南州庁舎前の広場で湯の処刑を目撃し、湯が両手を上げ最後に「台湾人万歳」といったのを聞いたそうである⁸⁴。

それでは、台湾語でいったとされる「もし、誰かに罪があるとしたら、それは私一人で十分だ!」「私には大和魂の血が流れている!」はどうであろうか。この証言は李谷によるもので『南瀛二二八誌』(2001年)に登場する。作者の涂叔君はどのようにしてこの李谷という人物を捜しあてたか覚えていないが、当時電話でインタビューしたそうだ⁸⁵。しかし、事件当時、処刑現場に

は大勢の見物客がいたにも関わらず、事件から44年経った後、ふと湧いて出たたった一人の証言を無条件に「新事実」として捉えてよいものだろうか⁸⁶。筆者は「新事実」よりはむしろ「新しい記憶」として捉えるべきだと考える。つまり、それは処刑目撃の原体験があるものの、湯の浮かばれぬ死を不憫に思う気持ちや他の都市に比べ台南での犠牲者が著しく少なかったなどという後天的知識から生まれた想像の産物であると考えられる。「日本人の血が流れている湯はこういったに違いない」「そういったように聞こえた」「立派な最期だった」などと思う（思いたい）気持ちがそのような言葉を湯に言わせたとは考えられないだろうか。同時にわれわれ聞き取る側もまたそういう気持ちを共有し、特定のナラティブを形成する協力（共犯）者であり得る。すなわち湯の死を悼む者にとって、一定の歳月を経たのち、民主化以降の「愛台湾」ナショナリズムの情熱にも駆られて、「過去の記憶」は信じるべき「真実」として昇華されていった可能性を指摘したい。湯徳章の「最期の言葉」と同様に、処刑された後の再審の結果が「無罪」であったとする説も同様のロジックで説明できよう⁸⁷。

このような政治的プロセスを経て生まれた記憶は門田のような作家によって国民的叙事詩に進化している。たとえば、門田は李の証言を脚色し、湯徳章が二発の銃弾を受けてもまだ倒れず、三発目を眉間に受け、力尽きたとしている。再び、門田より引用する。

パーン

二発目の音がした。民衆は、あたかも、自分が撃たれたかのように息を止めた。徳章は、立ったままだった。二発の銃弾を受けても、それでも、徳章は立っていた。民衆は信じられないものを見た。人間の気迫というものは、死ぬときこそ、発揮されるものなのか？徳章の歩んできた不屈の人生は、国民党軍の銃弾ごときで、閉じさせられるものではないのだろうか。李谷は、もう、目を覆いたくなった。しかし、見なければならなかった。かつての上司であり、神々しささえ感じられる、一人の男の姿を見て、彼は絶対に目を閉じてはいけなさと感じていた。

パーン

その時、三発目の銃声が鳴った。銃弾は、徳章の眉間を命中した。ゆっくり、徳章の身体は倒れ始めた。それは、スローモーションでもみるかのようなようだった。徳章の身体は、ゆっくり、ゆっくり、倒れていった。巨木が倒れていくような錯覚を李谷は、おぼえた。

(なんという勇ましさか……)

知らないうちに胸の前で手を合わせていた李谷は、この凄惨な現場に立ち会いながら、湯徳章という人物と生前、いくばくか関わりを持っていたことに、誇らしさが溢れてきた。そして、日本語で最後に叫んだ「台湾人、バンザイ！」という言葉の意味を考えていた⁸⁸。

これは門田の「想像」(imagination)が作り出した「創造」(creation)であり、ノンフィクションではない。むしろ文学といった方が正しい。にもかかわらず、門田のナラティブに対する批判は全く聞かれず、逆に湯徳章を「台南の英雄」「恩人」とする語りは「新しい事実」を生みなが

ら広がっている。門田の著作の出版半年後には、「湯徳章の気迫に押され、軍人は他の死刑囚の銃殺を取りやめた」「ゆえに二列目にいた伯父(楊熾昌)は命拾いした」という証言が現れ⁸⁹、また一年後には、91歳の元台南工学院の学生が、ネットで湯徳章が二二八事件当時学生のリストの提出を拒んだために射殺されたとの記事を読んで、娘に自分が事なきを得たのは湯徳章のおかげだったということを初めて知ったと頬を濡らしながら伝えたという証言が登場している⁹⁰。

湯徳章伝説はなぜこうも歓迎されるのか。それは前述したように新しい国民的英雄を渴望する多くの台湾人の願望が根底にあるといえる。同時に「ふたつの故国に殉じた日本人英雄」は植民地支配肯定論者にとっては、正にわが意を得たりといわんばかりの美談である。さらには、植民地統治と「大東亜戦争」という日本が過去に犯した罪に何かしらの後ろめたさを感じる「良心的日本人」にとっては、今日の日台友好ムードのなか、湯徳章という「日本人」がすすんで台湾人のために犠牲になったとする脚本は「贖罪」すら感じさせる爽快かつ感動の物語として映る可能性がある。

むすびに

日本人という「原罪」ゆえに処刑された湯徳章は、一部の台南の有力者、市参議会議員の知人たちに裏切られ、当局によって連行され、濡れ衣を被って処刑された。それはあたかも屠殺場に引かれてゆく子羊のようである。幼くして父親を亡くし、のちに父同様に警察界に身を投じたものの、「台湾人の人権のために役に立ちたい」と思い立ち、単身で日本内地に渡り、難関の高文試験を突破し、弁護士になった無類の努力家は日本に残らないかという知人らの勧めを断り、初心を貫徹し台湾に戻り、姓を「湯」に戻している⁹¹。それは「台湾人」として「台湾人」のために生きようとする決意の現れであったが、結局は「台湾人」に裏切られ、「日本人」として処刑された⁹²。

門田の著書を読んだものは口々に感動したといい、あたかも台湾版のタイトルのように湯徳章は「愛と正義」を体現した人物とされている。現に、李谷は湯徳章を「真に台湾を愛する者だ!」と称え、涂叔君は湯を紹介する章の見出しを「ただ正義のため 権力を恐れず 己を捨て他人を救った湯徳章」とし、謝碧連もまた、「その台湾に対する熱愛は死をもっても変わることはなかった」と感傷的な表現を用いて湯徳章の死を悼んでいる。台南州庁舎前の公園で射殺され、三日間放置された死体は、70年の歳月を経て、いま「愛台湾」「日台友好」という「福音」を携えて「復活」を遂げたかのようなのである。しかし、同時にそれはまた「真実」に蓋をし、「正義」の名をもって、「真の正義」を殺すアイロニーを産み出している。

90年代の台湾の民主化とともに、それまで封印されていた日本統治期の記憶が公の場で噴出した。それは「台湾独立」を支持する者が、ある意味「中国」と離別するために戦略的に日本を持ち上げた側面をもつといえる。烏山頭ダムと嘉南大圳を設計した八田與一が半ば神格化され、多くの日本統治時代の建造物が修復、保存され、台湾各地で観光名所、地元の文化的ランドマークと化しているのは、文化交流の促進、観光経済の発展といった要因の他に、台湾独自のナショ

ナル・アイデンティティーの確立というしたたかな政治目的があるとみなすべきである。すなわち、植民地期の日本人の顕彰や建造物の保存と再利用は「日本統治を経験した台湾は断じて中国の一部ではない」「台湾は台湾である」というナショナルな主張を含意している⁹³。湯徳章伝説が生まれたのが毎年5月8日に八田與一の墓前祭が盛大に行われ、また近年では日本統治時代の建造物である林デパートや旧台南地方法院が新たな観光名所となっている台南であるのはけっして偶然の一致ではない。台南市における日本統治時代の遺産の再生・再利用は頼清徳市長(2010.12-2017.9)の執政下で加速していったように思うが、それは市政府の文化政策という上から下への動きではなく、むしろ台湾独立派諸団体の下から上への圧力に市政府が抑制しつつも便乗している様相がある⁹⁴。日本統治をめぐる「記憶のポリティックス」は別稿に譲るとして、最後に湯徳章顕彰の動向を記載しておく。

1998年2月27日、湯の胸像が贈呈されたことを受け、台南市政府は民生公園を湯徳章紀念公園と改名する。

2014年3月12日、台南市長頼清徳は湯徳章を悼み、湯の命日にあたる3月13日を「台南市正義と勇気の記念日」とした。

2015年3月13日、湯徳章の旧居は「台南市の政治分野における歴史的な重要人物の旧居」として認定されることが決まり、市長頼清徳からプレートが贈呈された。道路拡大のため、旧居の一部取り壊しが囁かれているが、一部の市民は文化遺産としての完全保存を求めて、連署などの活動を展開している。

2017年1月、門田隆将の「湯徳章伝」が日台同時出版される。

2017年2月、3月、台南市政府の支援、台南市文化資産保護協会の主催で湯徳章逝世70周年紀念活動「乱世英魂」が催される。2月25日から3月5日まで、原台南愛国婦人館で記念展を実施した他、

2月25日、3月5日、湯徳章律師紀念講座を二回にわたって開催。

2月28日、午前9-12時、「湯徳章律師生命歷程之旅」と題し、湯徳章と所縁のある場所(湯徳章旧居、旧台南州参議会、湯徳章紀念公園、旧台南警察署、旧台南地方法院など)を巡礼する。

3月13日、午前10時、湯徳章紀念公園で追悼式を催す。長男の湯聰模(85歳)が初めて参加する⁹⁵。



図3 湯徳章紀念公園

(出所) 著者撮影 (2017年3月31日)。

(注) かつて児玉源太郎、孫文の銅像がそびえたこの広場の中心に湯徳章の銅像が建立される日は訪れるのだろうか⁹⁶。

注

- 1 「台南暴徒坂井徳章 昨執行槍決」『中華日報』1947年3月14日。
- 2 「本會簡介」、財團法人二二八事件紀念基金會ホームページ (<http://www.228.org.tw/pages.aspx?v=182D4F7824F7815C6> 2017年10月3日アクセス)。事件の死亡者数を1万8000人から2万8000人とする説は人口統計を用いた陳寛政が1992年に政府の研究報告書のなかで発表したものであり、以後、これが最も信憑性がある説とされてきた。しかし、2017年2月の二二八事件紀念シンポジウムでこの説を覆す新説が発表された。1947年の月別男女死亡数から二二八事件犠牲者の人数の推定を試みた林邑軒と呉俊盛は死亡者数を1304人から1512人とした。唐詩「最新研究：228事件人数估 家屬激動駁斥」『民報』2017年2月25日 (<http://www.peoplenews.tw/news/f38b3b50-2686-43e6-af04-b86bacb49368> 2017年10月1日アクセス)。
- 3 「族群」とは台湾でエスニックグループを指す。ここでいう分裂とは戦前から台湾に在住してきた「本省人」と戦後、中国大陸から内戦の戦火を逃れ、台湾に移住した「外省人」との対立を指す。二二八事件では一般に前者が「被害者」、後者が「加害者」とみなされている。ちなみに、二二八事件でのちに司法で裁かれた加害者は一人もいない。詳しくは呉乃徳論文を参考にされたい。Wu, Naiteh, "Transition without Justice, or Justice without History: Transitional Justice in Taiwan," *Taiwan Journal of Democracy*, vol.1, no.1, 2005, pp. 77-102.
- 4 黄文博、林文煌「拉倒國父銅像 台南獨派生事端」『中時電子報』、2014年2月22日 (<http://www.chinatimes.com/realtimenews/20140222002558-260407> 2017年10月1日アクセス)。
- 5 中国語のタイトルは『湯徳章——不該被遺忘的正義與勇氣——』台北、玉山社、2017年。
- 6 たとえば、台湾への観光客や高校生修学旅行者の人数の推移がこの兆候を顕著に表しているといえる。日本人観光客は2010年の108万153人から2016年には189万8854人に増加し、2010年には1万人に満たなかった台湾への高校生修学旅行者は2016年には4万1878人に急増している。JTB総合研究所 (<https://www.tourism.jp/tourism-database/stats/outbound/>) と修学公益財団法人全国修学旅行研究協会 (<http://shugakuryoko.com/chosa/kaigai/index.html>) の統計を参考にした。

- 7 2015年2月に台北市長の柯文哲が海外メディアの取材の中で「(アジアでは) 植民地支配が長いほど、社会が発展している。シンガポールは香港、香港は台湾、台湾は中国よりよい」と「植民地肯定論」とも取れる発言をし (<http://foreignpolicy.com/2015/02/02/a-recording-of-fps-interview-with-taipei-mayor-ko-wen-je/>)、物議を醸したが、台湾ではそのような認識が民衆の間でむしろ一般的であるといえる。また、八田興一の設計した烏山頭ダムなど台湾各地に残る日本統治時代の遺産を巡り歩く日本人旅行者の多くが現地でも歓迎されている背景には台湾社会での日本統治時代に対する肯定的な認識があるといえる。無論例外はある。
- 8 台湾での資料には「新居徳蔵」とある。新居家に養子に行ったとされるが、詳細は不明。
- 9 1922年8月に「内台共婚便宜法」が施行され、日本の戸籍を有しない台湾人と内地人の結婚が許可されたが、「内台共婚法」が正式に成立したのは台湾人の戸籍制度が確立した1933年であった。黄嘉琪「日本統治時代における「内台共婚」の構造と展開」『比較家族史研究』第27号、2013年、132頁。
- 10 享年41歳。台湾総督府警務局編『臺灣警察遺芳録』台北、台湾総督府警務局、1940年、214頁。この日の襲撃で、吉田警部補を始めとする14名の警察官と6名の民間人が殺害された。秋澤次郎『臺灣匪誌』臺北月報発行所、1924年、220-221頁。台湾領有後、島内住民による「最後の武装蜂起」と評されるこの事件では、1957名が逮捕、1413名が裁判にかけられ、結果、死刑866名、懲役915年453名、無罪86名、獄死7名であった。程大華編著『台湾先賢列傳(第二輯):余清芳傳』台中市、台湾省文獻委員會、1978年、155頁。
- 11 「台南州警務部 広範囲の異動 四郡警察課長を中心に 湯徳章氏警部補に昇進」『台南新報』1933年10月5日。門田は「本島人唯一の警部補」としているが、その根拠は明らかでない。門田隆将『汝、ふたつの故国に殉ず——台湾で「英雄」になったある日本人の物語——』角川書店、101頁。統計をよると、1931年末の時点で、すでに本島人警察官の内、警部補2名、巡査部長6名である。「本島人警察官の数」『台湾警察時報』208号、1933年3月1日、109頁。
- 12 『臺灣總督府及所屬官署職員録』1936年、547頁。
- 13 「坂井氏に榮冠 見事高文合格」『台湾日日新報』1943年7月7日。
- 14 謝碧連『二二八事件在台南市與湯徳章律師之遇難』台南市政府、1996年、63頁。これは同年の『台南文化』新42期に掲載された論文の抜き刷り冊子である。しかし、公文書によると、湯徳章の辞職は現職の弁護士は法律上区長を兼任することが許されていないためとされている。台南市西区区長の柯南獻弁護士も同様の理由で職務を解かれている。「臺南市政府建設局産業課課長謝汝川等3員任免案」『臺灣省行政長官公署檔案』1946年7月1日、國史館臺灣文獻館、典藏號00303231279019。
- 15 「臺南省市參議員韓石泉等當選通報」『臺灣省行政長官公署檔案』1946年4月16日、國史館臺灣文獻館、典藏號00301990004012。
- 16 謝碧連、前掲書、52頁。
- 17 近年、2月28日の前後に台湾各地で蒋介石の銅像が破壊されたり、撤去されたりしているのはその一例といえる。多数の死傷者を出したにもかかわらず、今日に至るまでただ一人の加害者も認定されていない移行期正義のあり方に対する不満の表れである。
- 18 Edmonson, Robert, "The February 28 Incident and National Identity" in Stéphane Corcuff ed., *Memories of the Future: National Identity Issues and the Search for a New Taiwan*. Armonk, NY: M. E. Sharpe, 2002, pp. 25-46.
- 19 司馬遼太郎、李登輝「街道をゆく 特別対談 台湾紀行 場所の苦しみ——台湾人に生まれた悲哀——」『週刊朝日』1994年5月6-13日、49頁。
- 20 註2参照。
- 21 頼澤涵總主筆『「二二八事件」研究報告』台北、時報文化、1994年、110頁。
- 22 文獻會「台南市二二八事件資料摘録」『台南文化』新33期、1992年6月、111頁。また、台湾語歌手の郭一男(1931年生まれ)は二二八事件当時、台南工學院の学生らが電柱に「工學院は立てり」などの抗議のスローガンを張り、「台湾自治!」と叫び、「義勇軍行進曲」を歌いながら街を行進したと回想している。「親眼見到屍體被褻瀆 歌手郭一男沉痛告白」『壹週刊』2017年3月4日 (<http://www.nextmag.com.tw/realtimenews/news/253554> 2017年12月30日アクセス)。
- 23 張大邦「不滅的烙印—張大邦の二二八、白色恐怖記憶(上)」『高雄文獻』第2卷第1期、171頁。
- 24 なお、郭振純は軍が台南市に進駐してきた際に、議会で捕らえられたものの、護送中トラックから飛び降り、逃走し生き延びている。胡慧玲、林世煜『白色封印:白色恐怖1950』台北、国家人權紀念館籌備處、2003年、166-170頁。景美人權「郭振純口述歷史」(<https://www.youtube.com/watch?v=EnFzma7Eu8c> 2018年3月20日アクセス)も参照。
- 25 謝碧連、前掲書、21頁。
- 26 門田、前掲書、303-306頁。

- 27 門田、前掲書、285頁。ちなみに、二二八事件の初期の研究で、湯徳章が初登場した林啓旭の著作では、軍当局による市民虐殺を未然に防ぐために湯が身を挺して動乱の全責任を負ったとしているものの、学生のリストに関する言及はない。林啓旭『台湾二二八事件総合研究』高雄、新台政論、1983年、153-154頁。
- 28 卓高煊『五十年從政憶述』1984年、32-34頁。謝碧連、前掲書、37-38頁から再引用。
- 29 湯聰模『台南文化』新33期、1992年6月、152-159頁。
- 30 同上書、156頁。
- 31 註13参照。
- 32 張炎憲ほか『二二八事件責任歸屬研究報告』台北、二二八基金会出版、2006年、67頁。
- 33 柯遠芬『臺灣二二八事變之真像』第5章、中央研究院近代史研究所編『二二八事件資料選輯(一)』台北、中央研究院、1992年、27頁、謝碧連、前掲書、11-12頁から再引用。
- 34 のちに湯は処刑、侯は事なきを得、李國澤は逮捕されたが、すぐに釈放されている。事件当時、台南工学院の学生だった王振華は李は北京語ができたためすぐに釈放されたとしている。文獻會、前掲書、145頁。
- 35 韓石泉『六十回憶：韓石泉醫師自傳』台北、望春風文化、2009年、191頁。
- 36 同上書、192頁。
- 37 卓高煊、前掲書、32-34頁。謝碧連、前掲書、37-38頁から再引用。
- 38 前掲、『中華日報』1947年3月14日。
- 39 同上。
- 40 たとえば、韓石泉の義理の弟にあたる莊茂林は政府転覆の罪で3年6か月の有罪判決を受けたものの、二審で無罪判となる。謝碧連、前掲書、43頁。
- 41 謝碧連、前掲書、50頁。
- 42 たとえば、柯遠芬は「事變の本質疑不單純是暴徒的暴亂，而是幕後有一政治大陰謀—企圖推翻政府、奪取政權、此種政治大陰謀之幕後主使者，自非共產黨莫屬（事件の本質は單純に暴徒による暴亂ではなく、背後に政府転覆、政權奪還を意図する政治的大陰謀があった。こうした政治大陰謀の主導者は共産党以外には考えられない）」と回想している。柯遠芬「事變十日記」台湾新生報社編『衝越驚濤的年代』台北、台湾新生報社、1990年、240-241頁。張炎憲、前掲書、228頁から再引用。
- 43 戦後、公務員、技術者、学者など7139名およびその家族、計2万7227人の日本人が国民政府の要望により留用された。これら留用者は二二八事件の後、263名（家族を含め776人）を除いてすべて日本に引揚げた。歐素瑛「戦後初期在台日人之遣返」『國史館學術集刊』第3期、2003年、207、212頁。
- 44 「社論：將留用日人全部遣回去」『中華日報』1947年3月27日。
- 45 謝碧連、前掲書、21頁。
- 46 門田、前掲書、284頁。
- 47 同上書、285頁。
- 48 文獻會、前掲書、112頁。
- 49 同上書、139頁。
- 50 たとえば、二二八事件当時、台南工学院在学中の陳祖句と鄧凱雄の証言がある。李金振主編『成大六十年国立成功大学建校六十週年紀念特刊』国立成功大学、1991年、100-106頁。
- 51 文獻會、前掲書、146-147頁。
- 52 日本名森本憲一郎、台湾から初めて陸軍士官学校に合格した人物で、陸士59期生として陸軍でも人気の飛行機乗りに選抜され、満州で終戦を迎えた。門田、前掲書、223頁。戦前の記事に「譽の皇軍將校へ本島二青年 畏し・有難き一視同仁の輝やく大御稜威 皇國日本の美風 この榮譽は偏に家庭生活の内地化」『台湾日日新報』1943年2月13日。釈放後、香港に渡る。文獻會、前掲書、145頁。
- 53 文獻會、前掲書、145頁。
- 54 同上書、143頁。
- 55 同上書、137頁。
- 56 白先勇、廖彥博編著『止痛療傷—白崇禧將軍與二二八』（時報文化、2014）では白崇禧の貢獻を高く評価している。しかし、長年二二八事件の責任問題について研究している中央研究院近代史研究所副研究員の陳儀深は台湾に「宣撫」に來た国防部長白崇禧が台湾省警備司令部參謀長柯遠芬の処分を主張したものの、陳儀と同様に二二八事件を台湾人による政府転覆と見なし、鎮圧と肅清を主張したとし、その責任は追及されるべきだとしている。邱國榮「二二八 白崇禧責無旁貸」『台湾教会公報』2017年9月15日 (<http://tcnn.org.tw/archives/26496> 2017年10月3日アクセス)。
- 57 文獻會、前掲書、137頁。

- 58 李金振主編、前掲書、102、106 頁。
- 59 二二八和平日促進會「他無罪、却已遭槍斃」『台灣文化』第 4 期、1988 年 3 月 15 日、29 頁。李筱峰『二二八消失的台灣菁英』台北、自立晚報、1990 年、257 頁。二二八事件の真相を求める動きとともに、湯徳章を英雄視するナラティブがこのあたりから生まれ、李谷の証言が掲載された 2001 年の涂叔君の『南瀛二二八誌』で確立したといえる。
- 60 3 月 14 日、「暴徒」坂井徳章の銃死刑を告げる中華日報の第一面記事の下に「台南市民の私蔵する銃器侯全成が責任をもって回収する」という記事が見える。その内容は「市民が私蔵する銃器は今(13)日の午後 6 時前まで市議会に引き渡すようはずであったが、いまだその数は多くないため、今晚、再び戒厳令を敷き、武装捜査を実行する。これは市民の安全確保と全参議員の要求によるものであり、侯全成が責任をもって回収する。銃器を所有する者は速やかに侯議員に提出せよ」。「台南市民私蔵槍械 由侯全成負責收繳」『中華日報』1947 年 3 月 14 日。
- 61 事件後の新聞の報道によると、台南市と台南県での外省人被害者は暴行を受け怪我した 30 余名とある。死亡者はゼロ。「台南市縣外省人 被毆傷三十餘」『中華日報』1947 年 3 月 26 日。
- 62 韓石泉、前掲書、185 頁、191-193 頁。
- 63 治安組組長の湯が処刑されているのに、二二八処理委員会主任委員である韓石泉は何の処罰を受けていないのは不自然なので調査するべきであるとの主張もある。頼澤涵總主筆、前掲書、325 頁。
- 64 文獻會、前掲書、107、135 頁。
- 65 同上書、135 頁。
- 66 銃器回収が完了する前に湯が逮捕されたため、侯が任務を引き継いだといえる。
- 67 文獻會、前掲書、114 頁。
- 68 文獻會、前掲書、131 頁。
- 69 張大邦「不滅的烙印——張大邦的二二八、白色恐怖記憶」『高雄文獻』第二卷第一期、2012 年 3 月、172 頁。
- 70 「黃仁里呈報林振藩 有關臺南市參議員侯全成保釋原因(民國 36 年 5 月 9 日)」許雪姬主編『保密局臺灣誌二二八史料彙編(二)』台北、中央研究院臺灣史研究所、2016 年、98-99 頁。同書に収められている他の公文書は、侯が台南防衛指揮部と市警察局に賄賂を贈ったために罪を免れたとしている。「林△△(原文のママ)電請黃仁里查報侯全成行賄逃罪情形」同上書、100 頁。
- 71 聞懷徳編著、『台灣名人傳』台北、商業新聞社、1956 年、78-79 頁。
- 72 この選挙で台南市中区から当選した侯は不正を行なったため、不適任者であると密告されている。侯の他林全義、黃百祿等 6 名が告発されている。「臺南市市参議員林全義等案」『臺灣省行政長官公署檔案』1946 年 4 月 4 日、國史館臺灣文獻館、典藏號 00301990004004。
- 73 「轎車碰撞觀光號 平交道上肇慘禍 前任省委侯全成喪生」『聯合報』1973 年 1 月 21 日。
- 74 「侯全成等突罹車禍 各方咸表驚悼」『中華日報』(南部版)1973 年 1 月 21 日。
- 75 張大邦、前掲論文、168 頁。
- 76 門田、前掲書、284 頁。
- 77 1989 年に勁草書房より出版されている。
- 78 門田、前掲書、290-291 頁。
- 79 同上書、291-292 頁。
- 80 この情報は謝碧連がどこから入手したものであって、楊熾昌の証言ではない。謝碧連、前掲書、65 頁。ただし、謝碧連は情報のソースを明らかにしておらず、この情報の真偽は定かでない。
- 81 張有忠、前掲書、139 頁。ここでは、午後 5 時頃に処刑されたとあるが、『中華日報』の記事では午前 11 時とある。張の記憶違いであろう。
- 82 涂叔君、前掲書、29 頁。李谷の証言以前に湯が複数回撃たれたという記述は存在しない。
- 83 謝碧連、前掲書、66 頁。ちなみに、湯徳章をモデルにした小説『董さん』のなかでは、董さんは日本語ではなく、台湾語で「台湾万歳」といったとしている。岡崎郁子はこれを日本人ではなく、台湾人として生きていこうとしていた湯徳章にはそのほうがふさわしいと作者の黃靈芝が判断したためであろうと解釈している。岡崎郁子『黃靈芝物語——ある日文台湾作家の軌跡——』東京、研文出版、2004 年、136 頁。『董さん』は 2001 年に世を問うているが、いつ頃書かれたものかはつきり分かっていない。しかし、小説では台湾語で「台湾万歳」といったとしている点などから作者の黄は謝碧連の文献(1996 年)からヒントを得て、この作品を書いたと想像される。
- 84 謝碧連へのインタビュー、2018 年 4 月 2 日、台南市謝碧連宅。
- 85 涂叔君へのインタビュー、2018 年 4 月 13 日、台南市南安国民小学校。
- 86 筆者は単に後から出てきたから信憑性がないとしているのではなく、学術的な史料として信用がより高い

- 二二八事件研究報告(1992)や謝碧連(1996)の研究でそのような事実の確認がない点から疑わしいと判断するわけである。「外典」(アポクリファ)として扱うのがよい。
- 87 「湯徳章無罪説」が二二八和平促進会が1988年に『台湾文化』で発表した「他無罪、却已遭槍斃—台南湯徳章律師的故事」に起因する。この記述が李筱峰の『二二八消失的台灣菁英』(自立晚報、1990)や楊碧川編集の『台灣歷史辭典』(前衛、1997)で引用されたため事実化された。しかし、『二二八事件在台南市 與湯徳章律師之遇難』の著者で弁護士謝碧連は国史館が編集した二二八事件檔案彙編全17巻、各1000ページ以上という膨大な資料のなかに湯徳章の再審無罪に関する資料は見当たらないばかりでなく、当時を知る張有忠などの司法関係者が一貫して湯徳章の無罪について及していない点から湯徳章無罪説を否定している。詳しくは謝碧連「二二八遭難者湯徳章無罪?之判決」(上)(下)、『台南律師通訊』第138、139期、2007年、参照。
- 88 門田、前掲書、307-308頁。
- 89 劉威良「台湾人、萬歲」:《湯徳章 不該被遺忘的正義與勇氣》——一本有關台日共同記憶的書『想想論壇』2017年7月13日(<http://www.thinkingtaiwan.com/content/6397> 2018年3月20日アクセス)。
- 90 林艾徳「湯徳章是誰?如果你是台南人、也許他是你們家族的救命恩人(湯徳章とは誰だ?もしもあなたが台南人であれば、彼はあなたの家族の命の恩人かもしれない)』『The New Lens 關鍵評論』2018年3月14日(<https://www.thenewslens.com/article/91599> 2018年3月20日アクセス)。
- 91 謝碧連、前掲書、60頁。
- 92 ちなみに、当時、台湾に留用されていた日本人は湯徳章を「日本人」とみなしていなかったようである。台南工学校(旧台南工業専門学校)教授・甲斐三郎は二二八事件後に日本人世話係の速水国彦に宛てた手紙のなかで「今回の事件に就いては当台南市は誠に静穏にて在り市日人一人の被害も御在りません。皆、其の幸運を喜んで居る…」と記している。河原功監修・編集、『台湾引揚・留用記録』第九巻、ゆまに書房、1998年、52頁。
- 93 Yoshihisa Amae, “Becoming Taiwanese: Appropriation of Japanese Colonial Sites and Structures in Cultural Heritage-Making—A Case Study on the Wushantou Reservoir and Hatta Yoichi,” in Hsin-Huang Michael Hsiao, Hui Yew-Foong, and Philippe Peycam, eds. *Citizens, Civil Society and Heritage-Making in Asia* (Singapore: ISEAS, 2017), pp. 251-280.
- 94 その一例として、2016年2月、台湾羅馬字協会、台独連盟台南分部などの台南の独立派市民グループが頼市長に3月13日を「正義と勇気の記念日」ではなく、「湯徳章記念日」と改めるよう要求した。蔡文居「還我湯徳章記念日!獨派來頼神放手去做」『自由時報』2016年2月21日(<http://news.ltn.com.tw/news/politics/breakingnews/1608877> 2017年12月30日アクセス)。また、莉莉水果文化館館長李文雄氏とのインタビューからもそのような証言を得た。李文雄氏へのインタビュー、2018年1月16日、台南市莉莉水果文化館。
- 95 蔡文居「湯徳章逝世70週年 湯子首度現身指證受難地」『自由時報』2017年3月13日(<http://news.ltn.com.tw/news/politics/breakingnews/2003113> 2017年10月3日アクセス)。
- 96 本稿査読中に台南市政府は湯徳章記念公園を日本統治時代の大正公園同様の外観に復元する決定を下し、2018年1月現在工事中である。報道によると、広場の中心には正義と勇気をテーマにした芸術作品を設置し、政治人物の銅像は建立しないそうである。張榮祥「重現原貌 日治台南大正公園修復動工」『中央通訊社』2017年9月19日(<http://www.cna.com.tw/news/acul/201709190243-1.aspx> 2017年12月30日アクセス)。

(2017年10月12日投稿受理、2018年2月19日採用決定)

〔付記〕

本稿の修正にあたり、査読の先生方と清水美里氏(早稲田大学)から貴重なコメントを頂いた。記して深くお礼申し上げる。